

博物館展示論

(解答はすべて解答用紙に記入し、この問題用紙に記入しないこと。)

1. 次の①～⑤の () について、下の語群から最も適切な語句を選び、文章を完成させなさい。(同じ記号の箇所には、同じ語句が入る。)(各2点)

フィルムアーカイブは、19世紀末に誕生した映画の記録媒体であるフィルムと、その関連資料を収集・保存・公開する活動によって、映画文化の継承を目的としている。

フィルムに音をつける技術がなかった初期の映画は (①) と呼ばれ、スクリーンのそばで音楽が演奏される場合もあった。日本では、映画解説や上映中の語りを担う (②) が登場した。

初期の映画は、欧米に比べ、日本での残存率が低い。災害や戦禍により焼失した例もあるが、保存意識が低かったことが理由でもある。溝口健二、(③) などの映画監督による戦前の劇映画は、その多くが失われている。

日本では、1952(昭和27)年から公的な機関による映画保存活動が始まった。現在、(④) は、唯一の国立の映画専門機関である。所蔵映画のうち (⑤) が最も多くを占める。

1964(昭和39)年、アメリカ議会図書館に、日本映画が残存していることが判明した。段階的に返還が進められ、2023年・2024年、(④) にて「返還映画コレクション」として上映された。

(①) は、音声・音響が伴わない映画であり、サイレントともいう。

(②) は、徳川夢声、大蔵貢などが人気を博し、日本独自の映画文化を形成した。

(③) は「東京物語」1953(昭和28)年、カラー映画「彼岸花」1958(昭和33)年、などの映画監督として知られる。

(④) は、2018(平成30)年3月まで、東京国立近代美術館の一部門であったが、同年4月に独立した。

(⑤) は、所蔵する日本映画のうち、4割以上(2024年3月末)を占める。

語群

| | | | |
|--------|-----------|--------------|-----------|
| 黒澤明 | アニメーション映画 | 活動弁士 | 国立新美術館 |
| トーキー | アーキビスト | 小津安二郎 | テレキャスター |
| 無声映画 | 今村昌平 | サウンドネガ | 国立映画アーカイブ |
| ニュース映画 | 文化・記録映画 | 国立アトリサーチセンター | |

2. 次の①～⑩の用語の中から5つ自由を選び、それぞれの用語について、番号を記して1行以内で簡潔に説明しなさい。(各3点)

- ① 動線計画
- ② 動態展示
- ③ コンディションレポート
- ④ データロガー
- ⑤ グレア
- ⑥ キャプション
- ⑦ 免震台
- ⑧ ホワイトキューブ
- ⑨ エコミュージアム
- ⑩ メタバースミュージアム

3. 美術館・博物館では、来館者が鑑賞中にメモをとることを認めている場合がある。その場合、筆記用具に鉛筆が推奨されている。なぜ鉛筆なのか、その理由を簡潔に100字程度で説明しなさい。(20点)

4. 美術館・博物館では、オリジナル（原物）に限らず、レプリカ（複製）を併用して展示する事例がみられる。資料・作品を長期間にわたって展示することに伴う劣化や損壊を防ぐという理由の他に、どのような理由があるか。具体的な事例を挙げ、考えられる理由のひとつを250字程度で説明しなさい。（25点）

5. 展示室内で観客が資料・作品に触れるのを防ぐための策や工夫について、「バー等による結界を設置する」以外に、できるだけ種類・性質の異なるものを3つ具体的に挙げて、それぞれの長所と短所を、300～400字で述べなさい。（30点）